

重なる歴史の断酒会 今日に生かす

～下司病院と断酒会の歴史を踏まえて～

下司病院理事長 下司孝之

キー・ワード 「断酒会の原点」 「内から外へ」

今日は 60 周年記念例会にお招きをいただきまして、ありがとうございました。

小塩完次さんや山室牟保さんには父がお世話になりました。下司孝麿宛のお手紙が沢山残っています。先頃なくなられた貴会の小塩政子さんは二度も東京から高知酒害サマースクールに来られているのにおっしゃらないものですから、ご紹介もできずに失礼しました。私の連れ合いも大学院の論文のことで貴会の 49 周年記念例会にお伺いして、お世話になりました。

下司孝麿は禁酒同盟からは断酒会結成後も大変なご指導を受け、貴会の禁酒新聞も度々断酒会の動向を掲載していただき、孝麿自身も亡くなるまで、永く顧問にまでさせていただいて恐縮の限りです。

1 断酒会のルーツ

断酒会のルーツ（源流）は禁酒運動です。

有名なところでは「青年よ、大志を抱け」の名文句で知られる北大クラーク博士が「学生が飲酒にふけり、学問を疎かにしている」様を嘆いて禁酒運動をしたことが知られています。

又、安藤太郎ハワイ総領事が日本からの出稼ぎサトウキビ刈り労働者が飲酒の悪癖に染まっているのを嘆き、樽を割って自らも禁酒に踏み切ったことが知られています。

禁酒は会ではなく「運動」から始まります。

アメリカではワシントンクラブの禁酒ステップに手を入れ AA は発展します。AA は会というよりは断酒会以外は手がけない運動体です。

日本では戦後、日本禁酒同盟が断酒の会を発想します。1953 年、昭和 28 年 9 月 12 日禁酒同盟傘下に「断酒友の会」が生まれ、これが日本における最初の断酒会発祥になります。

運動で始まったものは収まりかえった「会」で終わらせては発展がありません。断酒会は自らの問題とするところは会の名前を使って運動できます。（AA は出来ない）

一般財団法人日本禁酒同盟（Japan Temperance Union）は「酒害に関する知識を普及し酒害の予防及び酒害者の救済を目指す団体」で 1920 年設立されます。

禁酒運動の金字塔は 未成年者喫煙禁止法 明治33年 1900年

未成年者飲酒禁止法 大正11年 1921年

を成立させていったことで、戦前もタバコよりも飲酒の法案に手を焼いて 21 年もの差が出来ています。

やがて禁酒愛国・断酒報国の軍国主義へ巻き込まれていきます。ポスター標語にも『大東亜戦争に勝つまで酒をやめませう』『戦勝祈願断酒 酒代を戦費に』の文字が見られます。

禁酒同盟の加藤純二理事長（全断連顧問）は、全断連「かがりび」平成16年122号～平成17年125号へ寄稿してこうまとめています。

「禁酒運動は敗戦を機に『禁酒して対米英戦を勝ち抜こう』のスローガンが地に落ちてしまった。明治初期から日本の近代化に尽くして日本の土となった多くの宣教師などの会員の献身があつたにもかかわらず、禁酒同盟が『鬼畜米英』の声に抵抗しなかったことに大きな悔恨の念が起こったのではないかと思う。組織がそれから立ち直るのは大変だったのではないか。それに対して、断酒会とその全国組織である全断連には戦争体験責任は無かったのである。」

禁酒運動を政治が悪利用した例です。

だからこそ全断連『指針と規範』・断酒会規範の十項『断酒会は政治、宗教、商業活動に利用されない。』とありますが、単に選挙に利用されないといったことではない大問題なのです。

現行憲法は国民主権ですから、断酒会を国家政策に奉仕させるべきではないと考えられることになりませんが、戦前の歴史に学ぶことは十分にされていないように思います。

2 断酒会の原点

原点は酒害者民主主義だと思います。

『酒害者の酒害者による酒害者のための断酒会』（下司孝磨）

断酒会という言葉も禁酒運動が生み出した言葉ですが、禁酒運動の先進的な努力、工夫を取り入れて現在のアジア型というか、日本の断酒会を作り上げていきました。

キリスト教の影響も強い禁酒運動にして、よく断酒会の雛形を作り出したものだとご苦勞を拝察いたします。

横一列平等のAAには仲間を超越する神の存在を想像させ、西欧ならこれはキリストでしょう。

「断酒会は町内会や消防団などと同じ縦型組織ですが、横々運営を心がければ良い」（吉田建夫・高知精神衛生センター初代所長）の言です。

『病院と断酒会は平等』（下司孝磨）の原則に即して患者さんの主体性を認め、会が築きあげられて、大きな不祥事も無く全断連も50年間やってこられたのだと思います。

高度経済成長期に松村さんという優秀なオルガナイザーを得たこと、時と人の存在があればこそで、民主主義を尊重する運動として会を発展させてゆこうという近代的な考え方が重要であったと思います。そこには実践を尊ぶ地道な現場があります。

それ以前の病者運動は結核患者を中心とする戦闘的な『患者同盟』があり、治療には栄養をつける場の施設が必要な時代の要請から文字通り食べるための激しい生活権闘争を繰り広げていました。

経済と断酒会が急拡張を遂げる1960年代の後半からは学生の異議申し立て運動にも触発され、医療被害・薬害・公害など、会社や国の政策を問いたず運動が澎湃として出てまいります。

このような要求を掲げる運動の間にはさまれて出来た断酒会は第一義的に自らの問題に取り組み、他人事に流れる課題に取り組むことを立ち直りの最初期には戒めています。これは政治的に無自覚であれとする運動ではなく自分の足元を先ず固めるのが肝要なアルコール依存症の特質から取られた運動です。

これが「一日断酒、例会出席」の主テーマとして表されています。下司孝麿は新聞「断酒」4号より掲載された自らの断酒鉄言『酒をやめるにわけはない 一、今日一日だけ止めよう！ 一、例会に必ず出席しよう!』（1962.2）が標語の元の言葉であったと述べています。

国の社会保障政策や製造元責任を問う運動との違いが出たのは断酒会の持ち味でもあり、厚生省に『暴れる精神病院でも困り者のアル中の会』との警戒感を出させないようにしたからではないかと思えます。でも鉄言は「一日断酒、例会出席」のふたつにとどまらなかったし、政治的関心から遠のけというものでもなかったのです。

3 禁酒運動から断酒会運動へ

断酒会の原点はと問われれば、私は「酒害者民主主義」ではなかろうかと思えます。

断酒会の最初期に提起された言葉ですが、下司孝麿は「酒害者の、酒害者による、酒害者の為の断酒会」として支援者による越権行為をたしなめていました。これが酒害者民主主義として定着してきたように思えますし、医療や、行政の過度の介入に対する規範として機能してきたことと思えます。

下司孝麿は禁酒同盟から東京断酒新生会が独立する過程を目の当たりにしていますから、支援の限界を強く印象付けられたことでしょう。

これらの民主主義の理解は断酒会がAAの伝統から学びとったことでもあると思えます。断酒会の順当な発展は戦後の民主主義感覚と合致して断酒会を発展させてきたといえると思えます。

断酒会が創始者は松村春繁だと力強くいうのは、彼らのアイデンティティからであります。

今ここで、そもそも断酒会という言葉は断酒会が作った言葉ではなく、禁酒運動から生み出された言葉であり、原点の彼方に影響を与えた禁酒運動が源流としてあった歴史を確認する必要があると思えます。禁酒運動が近代日本の最初期から活動をはじめ、一定の社会的役割を果たしつつも、国家の戦争政策に飲み込まれ、「大東亜戦争に勝つまで酒をやめませう」という禁酒報国に随して、酒害者や国民の利益から離れていったことが戦後期に禁酒運動が国民の支持を失った原因ともなったことと思えます。

戦前の禁酒運動が、誰に依拠するのかを探り当て得ないで国家と容易につながった限界をここにみえます。禁酒同盟の機関誌「禁酒之日本」には名古屋大教授による酒害者は「断種」せよとの優性学的な論文が掲載されていますから、とても酒害者本人による断酒運動というところまでは意識が繋がらなかったのだと思えます。

戦後の禁酒運動には、戦争への協力にいたった反省から、酒害者に向き合う努力がなされて、AAに学び断酒友の会、東京断酒新生会、断酒修養会などの開設運営がなされていったと思えます。

AAは独立した存在ですから、断酒会も禁酒会から独立してゆくのも自然な流れだったのではないのでしょうか。

また、戦後期の禁酒会は戦争への反省から反戦平和の理念を掲げ、戦後初のノーベル賞受賞者・湯川秀樹などの「世界連邦」創設への運動へ手を伸ばしていったのだと思えます。組織は別でしたが禁酒会理事長に世界連邦を推進する片山哲元総理がなっていましたから彼の心情でもあったと思うのです。

余談ですが1960年、私も高校2年生のときに「世界連邦を作ろう」との主旨で学内弁論大会に登壇したことがあり、その雰囲気は分かります。残念ながら理想主義に過ぎ、よって立つ政治基盤が無く運動は広がらなかったのです。

断酒会は自助団体であります。現在の断酒会には、自分自身の断酒から、自分たちの断酒へ進んでいかなければ自分の断酒もおぼつかなくなるという確信部分が欠けていっているように思えます。それは

戦後の経済成長期にかもし出されたマイホーム至上主義・中産階級意識による狭い意味の個人主義による仲間意識の解体によるものと思います。

こうして断酒会の社会への露出度も少なくなっています。

そうした今、断酒会は誰と提携すべきか考えてみる必要があります。よく言われるのが、行政と病院との連携ですが、その二つともに行き詰っているのではないのでしょうか。「小さな政府」を掲げる社会保障政策により保健所は統廃合され、「役人を減らせ」で保健師さんは少なくなりデスクワークに張り付き、酒害家族教室はすっかりなくなり住民サービスは減りました。

病院でもアルコール医療に取り組んでいるところも減少し、極端な自己完結医療もみられます。

むしろ、断酒会にとっての連携相手は他の病者運動であったり、市民であったりする仲間性に目を向けるべきではないのでしょうか。

今一度、なぜ会なのか、なぜ全国組織が必要なのか問い直しが必要と思うのです。

4) 松村春繁初代断酒会・会長との出会い

★ 松村春繁 享年65歳 1905明治38年4月1日～1970（昭和45年）1月30日

後免町(現。南国市)の川田内科診療所より紹介されて来院、下司孝麿が勤務する町田病院精神科外来を受診。1950年～1956年の6年間、高知市内帯屋町二丁目の町田病院内科に5回入院を繰り返す。

『兄のアルコール依存症死』にも『今際の母の手が振り払った拒絶』にも『妻文子に常子の誕生』にも断酒できず、『主治医のなんともいえない顔』にこれは見捨てられては大変だと、ようやく断酒につながります。医師が敗北の医療を認め、そのとき松村に始めて断酒の意思が芽生えました。

○治療歴 精神病院入院歴はなし(町田には精神科ベッドはなく、なだいなだ等の精神病院入院記述は誤り。下司孝麿はアルコール依存症患者を系列の精神病院「精華園」には回さなかった) エメチンは失敗

○人柄 ベッドで聞いている広沢寅造 くどき文句は義理人情 ヘビースモーカー の印象があります。 このタバコで人生を終えました

○労働運動 戦前の無産運動では検挙歴もあるがこのとき早くも酒害で開催届けを忘れ演説会が弾圧を受けます。

○民同人脈 江田三郎 西尾末広 氏原一郎 佐竹晴記 片山哲ら、断酒会時に人脈を生かす。

○断酒運動 「2年ほど経つと自分で前を切り出しました」 病院がつけた秘書の川村効子嬢の談
「 余人はいざ知らず、貴君は治る 」 聞いたインテリ的小林哲夫さんは嬉しくなりました
「早く医師になって」 私に この時期、酒害に取り組む医師は皆無、今また医師不足な環境

☆ 下司孝麿 享年96歳 松村と9歳違い 1914（大正3年）8月17日～2011（平成23年）6月2日

1950年 エメチン療法を学会発表 この頃松村氏が受診に現れます。

1956年 松村春繁 断酒に踏み切ります

1958年 1月14日に下司が松村に断酒会創設・誘いの手紙を出します。

1958年 11月9日松村氏らの高知県断酒新生会設立を応援します。

禁酒同盟小塩完次講演会での松村春繁と小原寿雄、二人の出会いは、AAにおけるビル(証券マン)とボブ(外科医)の出会いを髣髴とさせます。当時は自助運動そのものが珍しい時代でそれまでは劣等者として「アル中は『断種』すべし」とされていました。

1960年 やっと断酒運動の芽が出ます

高度経済成長の始まり 鉱工業生産性指数と酒生産量の右肩上がり同一カーブを描きます。戦後猛威を振るった結核の終息と1960年代後半 医療被害・薬害・公害運動の起きた狭間に断酒会は高度成長を遂げます

5) 断酒会の誕生

断酒友の会	1953年、9月12日、日本で初、禁酒同盟傘下に発祥。
高知県断酒新生会	1958年11月25日、下司病院応接室
東京断酒新生会	1958年12月 5日、池袋信用組合会議室（断酒友の会より分離）

東京断酒新生会が禁酒同盟から独立 1962年 4月 1日
東京断酒新生会と高知の二つの会で全日本断酒連盟 結成 1963年11月10日 土佐電鉄文化ホール

その相方に禁酒同盟の援助がありました。「断酒会」という言葉や規範の原型が禁酒運動から継承しています。

6) 断酒会支援者

下司孝麿の高知県での取り組みは同時期取り組んだアメリカ生まれのライオンズクラブからは奉仕精神を学び、断酒会運営へのヒントにしました。

一方で、酒を排撃するものではないと酒国土佐で対社会的に断酒会とバランスを保つために知事などと酒を楽しむ社交クラブ『羊子会』結成します。

病気として酒害を捉え、治療は次第に →薬物療法 →集団精神療法 →断酒会へと進みますが、断酒会への支援が先行して、院内治療は遅れます。

全国行脚を続ける組織運動家の松村春繁氏を援助し組織化を支援することに精力を使ったといえます。こうして、時と人を得た断酒会は高度成長の日本社会に適応してゆきました。

高知で断酒会を支援した人としては沢村栄一高知大教授と秦泉寺正一高知大教授が上げられます。

沢村栄一 教授は、フルブライト資金で米留学。AAを視察、翻訳しました。田舎の高知から独自調査をして断酒会を支えていったわけです。

秦泉寺正一 高知大教授は、旗・バッチ・歌などにオリジナリティを發揮 集団療法の効果を知っていました。下司孝麿と同時に断酒会に集団精神療法を構想したといえます。東京オリンピックの準備に駆り出されて1962年頃には断酒会支援を終えました。

中沢寅吉 中沢薬業社長は、戦前から高知の禁酒運動家として私財を投じて禁酒運動を続けていました。2年間、毎回断酒例会に連続参加して下さっていました。

7) 断酒会のいいところ

うわべを飾らずに心情を語れるところ。

薄れ行く人間性のよみがえるところ。

断酒会は株のように誰かが得するから誰かが泣くことがない、何人でも立ち直る人数に制限がない。

お酒をやめるには仲間から酒害体験を聞けるところ。

励ましあい、助け合い、慰めあいの気持ちが触れ合う場所。(下司孝麿)

日本経済に貢献、経済貢献は1兆円と言ったことがあります。(下司孝麿)

何時でも何処でも誰でも出来る会(下司孝麿)

断酒の仲間を持って、ないのが自殺です。

仲間を大切にする断酒会には除名がない。(断酒鉄言・下司孝麿)

断酒会には病院への保険証も、税金の支払いも要りません。

断酒会こそ近江商人の家訓「売り手良し、買い手良し、世間良し」で繁盛した「三方良し」そのもので、「酒害者良し、家族良し、世間良し」の実践者。(下司孝之)

断酒会は我が国最大の歴史のある自助共助の病者団体です。

公益法人になって相互援助団体になったのでは。

徒党を組める幸せもあります。仲間がいていいですね。

精神病院の風通しを良くしました。

会として社会奉仕に動けます。

8) 断酒会は酒害予防に社会参加できる

酒害を生活習慣病として捉えると、アルコール依存症も予防が大切となります。予防には一次、二次、三次の三段階があります。

アルコール依存症の一次予防では病気の発生そのものを防ぎます。断酒運動は体験発表を持って地域や学校・職場の勉強会に参加が出来ます。

二次予防は病気の早期発見・早期治療のことで発見を手伝え、早期治療につなぐことが出来ます。

三次予防は再発防止で断酒会通いはりハビリの様なものでしょうか。

このように断酒運動は酒害を1次予防から3次予防までカバー出来る存在です。健康な習慣があるほど病気にかかりにくいことは酒害でも自明の理です。個人でも、会としてでも断酒会は予防活動に参加できる位置にいます。

9) 三つの否認を解除して

私はこの文の3、を追加してみました。

- 1、依存症の否認
- 2、家族を省みない否認
- 3、社会を省みない否認

1、は医療サイドでも気付きを促します。

2、は酒を飲んでいただけがまだまし、ちっとも変わってないと言われる・ドライドランカーからの脱却

3、1、2を克服して『家族ぐるみ』で取り組む課題です。

3、においてやっと世直しと余直りを補い合う関係を持つことが出来るようになると思います。

下司孝麿は晩年「断酒して5年も経てば奉仕活動に踏み出すべきである」と申し立てましたが、このような時期の到来でしょう。

酒害は習慣性や親などからの模倣性が強く、否認の克服を奉仕で乗り越える必要性を強く感じます。奉仕と言うと嫌がる向きもありますがボランティアのことで、自らの問題を解決しながら社会改良や変革などの社会活動に参加していくことが望ましいと考えます。

その人の志向に合ったあらゆる分野の社会運動への参加が自らの断酒を確かなものにもします。

『世直し』を志向するならば世直しに持続するエネルギーを送り出していくための1～3の否認を解除してゆく時間も思考過程もいるということです。

「余直り」は『世直し』の高揚感の中でスリップするのを押しとどめます。

社会改良なり、変革なりを思考するにしても酒害者は「余直り」の自己検証を続けていかなければいけない存在のように伺われます。

だからアルコール依存症の場合は回復と言うよりも『立ち直り』だとわたしは思います。

10) 自らの問題は『政治』だからと忌避できない。

農協でも医師会でも自らの問題は政治一般として見逃すことはありません。

アルコール依存症者に対しての最初の大きな試練は1970年代に葬り去られた『保安処分』ではなかったかと思います。保安処分は精神障害者にかけられてきた治安維持法のような社会防衛論による取締を主旨とする法律でした。

「良いアル中は断酒会へ、悪いアル中は保安施設へ」（下司孝之）という酒害者より分けの法律です。

これに対して、「断酒会は除名してはいけない」（下司孝麿）という原則を断酒鉄言に掲げています。最近北海道の断酒会は刑事事件にも追放はしませんでした、立派なものでした。

保安処分のような酒害者に予防拘禁をかけていく社会防衛論は依存症者の運動に分断をもたらします。小林哲夫さんは「ワイドショーでアルコール依存症者の犯罪を見ていると自分でも怖いと感じるが、こうして断酒例会に集まってくれば恐怖心も払拭されている。」と語っています。

1970年代、賛成に傾いていた大野徹全断連二代目会長のお宅に反対の立場で通いました

大野卓子夫人は所属するキリスト教人矯風会が反対しており反対で、話し合っただご飯をいただいて帰りました。

保安処分には三重県断酒新生会や高知県断酒新生会などが反対しました。

この反対運動は「指針と規範」の規範十項には抵触しないものであると思います。

11) 表彰・叙勲の捉え方

酒害者が断酒をしたことで公的な表彰を受けるのはおかしい
酒害を国に認めてもらうためなら個人叙勲もいい

小林哲夫
下司孝磨

全断連の場合は大野徹二代目会長が1992年勲4等瑞宝章受賞 継いで三代目井原理事長が受賞しました。対象団体として『保険文化賞』などに地方断酒会も選ばれるようになりました。

全断連が出来たとき、早く国に認められようとしたので受賞も理解できますが、今は国民と認め合う関係が大事ではないかと思います。

仲間とか病院から表彰を受けるのは無論いいことだと思います。

断酒会としての受賞はかまわないとして、保健文化賞などいくつかの県連が貰っています。

下司孝磨の場合酒害への取り組みから2011年6月2日(96歳)老衰で亡くなるまで国の叙勲は受けませんでしたが、叙勲の階級制が嫌だったようです。三代目井原理事長に勧められたときも断っていました。

アルコール関係で受賞したのは以下でした

1965年(51歳)	厚生大臣賞
1973年(59歳)	保健文化賞
1988年(74歳)	日本医師会最高優功賞

1 2) 下司病院からみた断酒会

下司病院は断酒会発足と同じ1958年に開設し、断酒会創立と共に歩んでいます。

最初に断酒会の体験性という「長所」を見抜いたのは、なだいなだです。

高知から下司孝磨の紹介状を持って久里浜病院を訪れた松村春繁を病棟に招きいれ講演をさせて、入院患者を感服させる体験性のすごさを会得しました

2008年の高知酒害サマースクールで講師におい出て下さった猪野亜朗先生も、「専門知識はスタッフの強み、断酒会は体験の強み、これを生かしあう事が大切です。」とおっしゃっています。

病院から見て断酒会運営に気がかりなこともあります。宇治の黄檗病院(おうぼく)故・広兼明副院長(1983年没)は『病院を一步でると同窓ではあるが、病院の子ではない』とっておられました。『××病院出身のだれそれ』と断酒会で言うのは断酒会の結束にとって良くないのではと私も思います。

対等の連携する相手として、賢明にも全日本断酒連盟は半世紀にわたり、不祥事もなく巨大な組織を維持しています。それは、行政の補助金に頼らず、自主財源を会員の会費に求めて、補助金はパンフレット製作などで社会に還元して公明正大な運営をなされてきたからだと思います。

2006年には全国精神障害者家族連合会(全家連)が国庫補助金流用分の返還要求をされ、それに伴う巨額負債で自壊してしまった事例もみうけられますから「補助金漬ばら撒き行政」とは恐ろしいものです。

(全家連) <http://www.kyosaren.or.jp/commentomo/2007/75.htm>

断酒会はこのような不祥事もなく半世紀を経て病院にとって信頼できる相手であり、対等で自立した連携先です。

1 3) 支援のあり方

かつて断酒会への医療サイドからの支援は「財政」「不動産」「労務」提供がありました。

善意の提供であったとしても、これらの実例からみて過度であってはいけないと思います。過度や、恩

惠的では依存からの脱却に障害物となると思います。

最初期の始動措置として限定的なものとして評価されるべきものだと思います。酒害者が主体的に拘る会を理解していた下司孝麿は『黒子に徹する』と支援者の立場をとっていました。

一方、断酒運動からの他の病者運動への支援はこれから活発化しなければいけない分野だと思います。公益法人としての病者組織としての責務であると思います。

支援は会員の多くが酒害相談にのることで断酒会の強化をもたらします。支援はまた酒害者との出会いを容易にします。それぞれの病者組織にも酒害者が含まれているからです。

国際連帯の一助となる支援も大事だと思います。何も外国まで行かなくても在日の中にも依存症者は多くいますから、日本社会の中の問題でもあります。アメリカの人々から頂いたメッセージですから、それを断酒会として中国や韓国、ロシア、東南アジアの人々へと伝えることも大切だと思うのです。

断酒会は過去にもそのような取り組みがありました。政治がギクシャクしているときこそ、断酒会も相互理解を深めるように動いて何も支障は無い様に思われます。

1 4) 現在の下司病院の成り立ち

断酒会とともに歩んだ55年でした。	(基本的に個別断酒会ではなく県連との付き合い)
全50床のアルコール専門病院	(平均在院日数62日で少し空床が出る小病院)
城下の街中に位置	(市民生活に密着・飲める環境)
開放病棟	(自由空間・任意入院)
患者自治会	(かつての久里浜方式)
酒害者雇用	(断酒会で会長職などはさせない。国の教育プログラムが必要)
小規模作業療法とデイケア	(自己完結しない領域)
高知アル研	(酒害啓発など)
松村断酒学校、酒害サマーへの取り組み	(職員。入院患者の参加)

1 5) 下司孝麿 断酒会までの道のり

1938年(24歳) 軍国下、卒業色紙への寄せ書きにフランス語で『自由と平等』と記します。

1941年(27歳) 生理学教授と2人で昼食に日米開戦を聞く「これで敗戦は決定した」と教授。

下司孝麿は戦前、精神科と生理学の両教室で学んだのが酒害の治療に役立ちました。

1945年(31歳) 高知県立女子医学専門学校教授

8月15日 疎開先でポツダム宣言受諾の放送を医学生一同が聴き、涙するも下司孝麿教授の「新生日本は普仏戦敗北後の仏国パスツールに習い科学で再興しよう」との演説に午後から授業に復帰しました。

1946年(32歳) 敗戦と南海地震で止めを刺され医専は廃校、町田病院精神神経科長 兼 精華園院長へ復職しました。

1950年(36歳) 塩野義製薬宣伝紙「モダンセラピー」に、慢性酒精中毒症の新しい治療薬：抗酒薬エメチンとアンタビユースが紹介されこれに着目し、

6月、日本で始めてエメチン療法を追試（酒へエメチン混入・吐根剤）しました。

10月、高知県医師会医学集談会で、慢性酒精中毒症の薬物療法（エメチンとアンタビュース）を発表

☆ この年アルコール依存症で苦しむ松村春繁氏を診察、エメチンを投与するも失敗しました。

パブロフの条件反射をヒントに高松の米軍図書館で抗酒剤資料を漁り、薬品会社に作らせました。

1951年（37歳） 日本精神神経学会にて 「慢性酒精中毒症のエメチン療法とアンタビュース療法」を
発表し、これを全国紙が報道、全国からの問合せ788件→497名（エメチン343名、アン
タビュース154名）を治療しました。

4月 下司孝麿がアンタビュース（抗酒剤）をNHKで発表、1000通の反響がありました。

1955年頃、中沢寅吉中沢薬業社長が禁酒新聞を届けてくれました。

1956年（42歳）下司孝麿が東京断酒新生会の例会を度々見学（少なくとも3回、銀座例会、個人宅例会
など）して、断酒会が集団精神療法であることに着目 アルコール依存症治療に本格的に取り
入れることを考えました。

1957年（43歳） 薬物療法の限界を感じ精神療法加味へ 名大で田原講師から集団精神療法を学び、
6月 精神病患者を「人」とみる事を訪米の旅から学びました。

1958年（44歳）2年断酒を続ける松村氏への年賀状に、「アメリカにAAという会があって、断酒に成
功している。貴方は断酒会を作って、救世主にならないか。」と送りました。

下司神経科を9月開院

11月9日 禁酒同盟小塩氏は高知・中沢寅吉氏の招きで講演、AAを紹介

講演を機に松村春繁氏が立ち上がり、断酒会結成を呼びかけます。その後も小塩氏はしば
しば土佐入り、手紙もいただきます。禁酒同盟経由で高知から東京へ全断連結成勧誘の手
紙を届けます。小塩完次氏は全日本断酒連盟結成に立会い、顧問になりました。

断酒運動に禁酒同盟は触媒の働きをした

11月25日 高知県断酒新生会が下司神経科応接室で誕生（参加者；松村春繁、小原寿男の2名）

1961年（47歳） 11月12日 『新聞断酒』を創刊。

1962年（48歳） 松村断酒学校 発足（松村の名は没後に付け加えられたもの）

高知アルコール問題研究所 設立

1966年（52歳） 9月 学術誌への松村・下司が共同発表しました（アルコール研究誌 創刊号）

1970年（56歳） 1月30日 松村春繁全断連初代会長死去。

1973年（59歳） 高知断酒サマースクール発足。（後日酒害サマースクールと改名）

16) 下司孝麿 AAを知る

AA訪米時、文献・学術誌、禁酒同盟、学者、米軍病院（座間陸軍病院 横須賀海軍病院・米軍の
高知市出身石丸博士より聞いて知りました。

他に武庫川病院AA = 現兵庫医大からも聞きました。

1957年、武庫川病院森村茂樹院長が酒害者の集団療法と抗酒剤の使用を見学、吉田医
師に勧め、てAAが医師主導で発足。（池田市断酒会20周年記念誌「生成一生まれか
わる」池田市断酒会顧問・子安医院院長子安義彦氏の「吉田先生の教え」より。）

☆ 断酒会結成後もAA支部になれないかと打診

1962年7月高知アルコール問題研究所が発足(下司孝麿所長)

1964年夏に所員の川村効子をニューヨークAA本部へ送り america as number 1 の時代だからAA支部になるメリットを考え打診をしましたが、①匿名性、②会費徴収、③会長制と、システムの違いからを拒否されます。AAには支部制度は無く、1953年日本最初の断酒会である断酒友の会もAA日本支部を名乗ったことがあります、認められなかったでしょう。

川村は次にNCA(AAの教育機関)マーチン・マン女史を訪ねた。女史は「アルコール中毒は病気です」「アルコール中毒者は尊敬されるべきです」と何回も力強く語ったそうです。

☆ 以後日本独自の断酒会作りへ

当事者である ミニー神父の日本でのAA開設に先立って断酒会が発足しました。

ドイツ医学からアメリカ医学へ転換した日本だが集団療法ではソ連の存在が考えられます。主に教育畑で研究されたマカレンコフ理論を医療に取り入れようとした青森健生病院・津川武一医師の実践もあったが、労働者の節酒運動に重きを置いたものであって発展しなかった。

17) 私の八項目提案

1、健康サークルとして喫煙習慣など、生活を改善

すぐ隣の依存症に対しての取り組みを今はまず見かけません

2、外に開かれた運営

断酒会の知名度は落ちています ネットワークを作らないと断酒に障害が起きます

3、家族会と平等な運営

妻子をエプロン姿で断酒会に奉仕させていいものだろうか

4、断酒後には奉仕を

酒害者に対する奉仕は自分の断酒の糧である (高知県断酒新生会の断酒カレンダー)

酒害者は5年もすれば奉仕活動を始めたらいいい (下司孝麿 晩年の言葉)

5、他の障害者団体に学ぼう

2012年、高知難病連の総会で慶応の医学部教授が断酒会を大変評価していましたが、当の断酒会員は出席していなくて誉められたことすら知りません

6、酒害相談を運動強化に

酒害相談は例会と並ぶ大きな柱であったはずですが。昼例の試みや社会へ体験出前もどうでしょうか

7、社会学者のアドバイスを

社会的な観点からの外部からの指摘が欲しいところです

8、アジアとの交流

アメリカからいただいたメッセージを中・韓・露・東南アジアに届けよう

18) もう一度標語化します。

- 昼間例会 高齢化の中で出席しやすい会運営
- 酒害相談 自らの決意と会が強化される
- 他会交流 余所の会も覗いてみよう
- 行動断酒 学習からアクションへ体験出前
- 貧困対策 膨大な貧困層の出現に対応
- 断酒運動 自己満足の断酒生活でなく
- 学者動員 外部検証が必要
- 断酒親善 日本の酒害運動が孤立しないように

参考文献 『断酒に捧げん 松村春繁記』 高知県断酒連合会 絶版 1981年
『新聞断酒』 縮刷版・高知アルコール問題研究所 2000円 1987年
『松村春繁』 小林哲夫著 ASK出版 2000円+消費税 1990年
『断酒必携—指針と規範』 小林らによる全断連の出版 300円 1993年
『根本正伝』 加藤純二著 けやきの樹 2000円 2006年
— 未成年者禁酒法を作った人 根本正伝
『写真と日記で綴る小塩完次・とよ子の禁酒運動 世界連邦運動の歩み』 2011年
— 日本禁酒同盟 資料館発行 1,500円 印刷版、CDROM版共。